

【論文】

# 中華系幼稚園・保育所における多文化状況と保育実践

——保育者のストラテジーの観点から——

喜 始 照 宣

## 1. 問題関心

本稿の目的は、多様な文化的背景を持つ子どもへの就学前における教育・保育を展開している中華系幼稚園・保育所を対象とし、それらの施設が近年どのような多文化状況を経験しているのかを検討することである。特にストラテジーの観点から、そうした状況の中で保育者（幼稚園教諭・保育士など）はどのように問題対処を行っているのかについて考察する。

中華系幼稚園・保育所とは、日本における中華学校（Overseas-Chinese School）の関係者によって設立・運営されている就学前教育・保育施設のことである。現在、日本には5校の中華学校——東京中華学校、横濱中華學院、横浜山手中華学校、大阪中華学校、神戸中華同文学学校——があるが、それらの学校のほとんどが関連する就学前教育・保育施設を有している。具体的には、横濱中華學院及び大阪中華学校の幼稚（園）部、横濱中華學院の附属保育園として始まった横浜中華保育園、横浜山手中華学校とともに横浜山手中華学園によって運営される熊猫（パンダ）幼稚園、同学校関係者の女性たちによって設立された保育園小紅、神戸中華同文学学校と隣接する神戸華僑幼稚園などがこれに該当する。

日本の中華学校に関する調査研究は徐々に進められてきており、グローバル化する社会の中で、中華学校には華僑の子ども以外にも多様な文化的背景を持つ子どもたちが入学するようになっていること、学校側もその教育方針や経営戦略を柔軟に変化させていることが示されている（志水・中島・鍛冶編 2014, 芝野・石川・館 2015 など）。中華学校は以前の「華僑教育」から「華文教育」へとその教育方針を変化させており、各学校がそれぞれの特色を生かし「卓越性」を追求した教育を行うようになってきているのである（石川 2015 など）。

他方、中華学校と関係が深い中華系幼稚園・保育所では、現在どのような教育・保育が展開されているのだろうか。また、日本社会のグローバル化や華僑コミュニティの変容に対応して、入園する園児たちの背景の多様化や教育方針の変更を経験しているのだろうか。本論でも述べるが、中華系幼稚園・保育所は地域の華僑の子どものための教育・保育を行うことを目的として設立され、これまで多くの卒園児を中華学校に送り出してきた。そのため、日本における中華学校あるいは華僑・華人に関わる教育の歴史的変容と現状を描出する上で、中華系幼稚園・保育所は

看過できない存在であると推測される。しかし、それらに関して十分な調査研究はなされていない。したがって、まず各園の1) 教育・保育の方針やプログラム内容の特色、2) 保育者、子ども、保護者の文化的背景や保育者と子ども・保護者との関係性について比較検討することが求められる。

さらに、中華系幼稚園・保育所における教育・保育実践を知ることは、日本における多文化教育・保育に関わる調査研究の進展にもつながる。近年、日本では多文化教育・保育の必要性が大きくなっており、就学前段階での外国につながるのある子どもへの支援の重要性が指摘されている（国立教育政策研究所 2015）。特に中華圏につながるのある子どもが日本でも増加傾向にあり、かれらに対する保育のあり方を模索する必要がある。保育学領域では、特に1990年代以降、多文化保育に関わる現状把握や保育者の実践、子どもの相互関係について研究が蓄積され、日本の保育現場における様々な課題が浮き彫りにされてきた<sup>1)</sup>。そして、そうした実践的な課題の一つとして、「現状の日本の保育において、外国人児童に対する母語保障の重要性は意識されていない」（品川 2017, p.65）ことが指摘されているが、本稿が対象とする中華系幼稚園・保育所では、日本語と中国語の二言語を中心に、華僑やその他様々な文化的背景の子どもたちに向けた教育・保育を長期継続的に行ってきた実績がある。そのため、これらの園における保育者の日常的な実践や問題対処の仕方、そのヴァリエーションを明らかにすることは、現在の多文化保育の課題を乗り越えるための糸口になりうると考えられる。

そこで本稿では、下記3つの問い（Research Question：RQ）について、横浜市と神戸市に所在する中華系幼稚園・保育所4施設でのフィールド調査の結果に基づき検討する。

RQ1：中華系幼稚園・保育所は、中華学校との関係から、これまで華僑・華人子弟の教育・保育を担ってきたが、現在はどのような状況にあるのか？

RQ2：日本語が分からない子どもや保護者への対応など、多文化状況に関わって、保育者はどのような問題対処を日常的に行っているのか？

RQ3：幼稚園・保育所によって、多文化状況や問題対処の仕方にどのような違いがあるのか？

## 2. 分析の視座：保育者のストラテジー

本稿では、ストラテジーの観点から、中華系幼稚園・保育所での多文化状況における保育者の諸実践を考察する。ここでいう「ストラテジー」とは、「行為者がある制限された状況のなかで自己の目的や関心を最大限に実現していくための戦略」（稲垣 1992, p.99）を意味する。換言すれば、制約された状況で目の前の問題に対処し、「なんとかやっていく」ための方法のことである。

保育者のストラテジーとしては、これまで感情労働に注目した研究がいくつか行われている（中坪ほか 2011 など）。他方、多文化保育での保育者のストラテジーに関しては、横浜中華保育

園を事例とした喜始・長江（2017）がある。そこでは、当園の保育者たちが、認可園への移行後、日本語が分からない子どもが増える状況において、2つのストラテジーを実践していることが明らかになっている。すなわち、1)「子どもは自然と慣れていく」という乳幼児観のもと、過度な援助・介入は行わない「見守る」基本姿勢をとるストラテジーと、2) 日常的に生じる問題に対処するために、同僚の保育者・園長、幼児、保護者など「他者」を資源として活用する「協働ストラテジー」である。

本稿では、喜始・長江（2017）での知見を参照し、他の中華系幼稚園・保育所ではどのような保育者のストラテジーが見られるのかを比較検討する。

### 3. 調査データの概要

つぎに、調査データの概要を説明する。本稿で使用するデータは、2016年5月から2019年3月にかけて筆者が実施した「日本における中華系幼稚園・保育所に関わる調査」より得られたものである。同調査は現在も継続中であるが、これまで5つの中華系幼稚園・保育所にご協力いただき、日常の保育や行事の見学、園長・保育者等への聞き取りを行ってきた。また、各園が発行している冊子や内部資料等の提供も受けた。本稿では、それら調査協力園のうち、横濱中華學院幼稚園部、熊猫（パンダ）幼稚園、保育園小紅、認定こども園神戸華僑幼稚園の4事例を対象とする。これら調査協力園の基本情報（調査時点）は表1に示した通りである。なお、調査協力園の1つである横濱中華保育園については、喜始・長江（2017）にて園の現状や保育者の実践に関する検討を行ったため、そちらを参照されたい。

表1 調査協力園の基本情報（調査時点）

機関名	横濱中華學院幼稚園部	熊猫（パンダ）幼稚園	保育園 小紅	認定こども園 神戸華僑幼稚園
設立年	1947年9月	1947年9月	1967年4月	1952年7月
住所	横浜市中区山下町	横浜市中区吉浜町	横浜市中区吉浜町	神戸市中央区中山手通
法人名称	学校法人 横濱中華学院	学校法人 横濱山手中華学園	一般社団法人 横浜華僑小紅の会	学校法人 神戸華僑幼稚園
認可等	学校附属園	神奈川県認可幼稚園 (2010年～)	横浜市認可保育所 (2017年～)	幼稚園型認定こども園 (2014年～)
教職員数	9名	13名	14名	15名
定員数	90名 (3歳～5歳:計3クラス)	98名 (3歳～5歳:計6クラス)	33名 (3ヶ月～2歳:計3クラス)	160名 (3歳～5歳:計6クラス)

本稿では、おもに聞き取り調査データを分析する。聞き取り調査では半構造化法を採用し、会話の流れや内容に応じて柔軟に質問を投げかけた。また、事前に許可を得た上で会話内容はすべて録音し、その音源をもとにトランスクリプトを作成した。聞き取り調査の協力者の基本情報は

表2に示した通りである。ただし、神戸華僑幼稚園については、聞き取りデータだけでなく観察記録も活用し、園の状況をまとめた。

まず、横濱中華學院幼稚園部では、2016年9月14日・15日に幼稚園教諭計8名（主任、副主任含む全員）を対象とした聞き取りを実施した（2名ずつペアで各70～80分程度<sup>2)</sup>。また、2017年10月2日には、園長（横濱中華學院校長）から園の運営・実践に関わる課題や将来展望等を聞き取りした（約70分）。その他、園や子ども・保護者の様子を知るために、通常・延長保育、運動会などの参加・見学も許可をいただいた上で行った。

つぎに、熊猫（パンダ）幼稚園では、2016年9月12日・13日の2日にかけて、当時の園長（横浜山手中華学園副理事長）への聞き取りを実施した（合計約280分）。さらに、同年に開催された参観日、運動会の見学も行った。

保育園小紅では、2018年2月15日に園長と主任保育士への聞き取りを、2018年3月9日に理事長（元園長）への聞き取りを実施した（園長：約80分、主任：約15分、理事長：約70分）。また、園長先生のご案内のもと、園内見学も行った。

最後に、認定こども園神戸華僑幼稚園では、通常保育（午前10時～12時）の見学を計4回（2018年10月24日、11月21日、12月20日、2019年1月18日）行った上で、2019年3月6日に当時の園長への聞き取りを実施した（約80分）。保育見学については、見学中にノートにメモを取り、その後、観察記録として文章（フィールドノート）にまとめた。

表2 聞き取り協力者の基本情報（調査時点）

No.	園名	名前	性別	出生地	備考	インタビュー日
1	横濱中華學院幼稚園部	園長 A	男性	台湾	学校長と園長兼務	2017年10月2日
2	横濱中華學院幼稚園部	主任 A	女性	日本		2016年9月14日
3	横濱中華學院幼稚園部	副主任 A	女性	台湾	台湾で幼稚園勤務	2016年9月14日
4	横濱中華學院幼稚園部	先生 A	女性	日本	大学・中国語学科卒、北京留学あり	2016年9月14日
5	横濱中華學院幼稚園部	先生 B	女性	台湾	日本で大学卒、台湾で幼稚園・園長	2016年9月14日
6	横濱中華學院幼稚園部	先生 C	女性	日本	横濱中華學院卒、台湾で幼稚園勤務	2016年9月15日
7	横濱中華學院幼稚園部	先生 D	女性	台湾	台湾で大学卒、日本で短大卒	2016年9月15日
8	横濱中華學院幼稚園部	先生 E	女性	日本		2016年9月15日
9	横濱中華學院幼稚園部	先生 F	女性	台湾	台湾で大学卒、幼稚園勤務	2016年9月15日
10	熊猫（パンダ）幼稚園	園長 B	男性	日本(華僑2世)	横浜山手中華学校・元校長	2016年9月12日・13日
11	保育園 小紅	理事長 A	女性	日本(華僑2世)	保育園小紅・元園長	2018年3月9日
12	保育園 小紅	園長 C	女性	日本(華僑3世)	横浜山手中華学校幼稚園・元教員	2018年2月15日
13	保育園 小紅	主任 B	女性	日本		2018年2月15日
14	神戸華僑幼稚園	園長 D	女性	日本(華僑3世)	神戸中華同文学校卒業生	2019年3月6日

#### 4. 調査の結果

本節では、4つの幼稚園・保育所における多文化状況及びその中での保育者の問題対処について検討する。各園の多文化状況については、園・保育者、子ども・保護者の2側面から把握し

た。なお、以下の結果はあくまで調査時点での各園の状況を記述したものであり、現在とは異なる可能性があることには留意されたい。

#### 4.1. 横濱中華學院幼稚園部

##### 4.1.1. 園の沿革と教育の特色

横濱中華學院幼稚園部は横浜市中区山下町にある幼稚園であり、学校法人横濱中華學院が運営を行っている。同園は台湾（中華民国）系の横濱中華學院（小学部、中学部、高中部）の附属園であり、5歳児クラスの園児たちの多くが卒園後に横濱中華學院小学部に進学している。同園の卒園生であると入学の優先権はあるが、受験結果によって不合格となる場合もある。

調査時点での教職員数は9名、園児の定員数は90名である。なお、2021年に同園と隣接する横濱中華保育園が合併し、「幼保連携型認定こども園」として新規開園することが予定されている。園の沿革は表3の通りである。

表3 園の沿革（横濱中華學院幼稚園部）

年	
1947	中華民国教育法令により、学校理事会を設立。中学部と幼稚園部を増設し、校名を「横濱中華學校」に改める
1955	高等部増設が認められ、校名を「横濱中華中學」に改める
1968	新校舎落成。学校法人の資格を取得、校名を「横濱中華學院」に改める
1971	園児：40名、教員：2名
1972	園児：32名、教員：2名
1973	園児：19名、教員：2名
1974	中国国民党中央委員会より「国父紀念校」の名称使用が認められる。園児：17名、教員：1名
1975	園児：20名、教員：1名
1976	園児：25名、教員：1名
1977	園児：16名、教員：1名。この年以降、1980年まで園児20名未満、教員1名で推移。
1981	園児：20名、教員：2名
1982	園児：34名、教員：2名
1983	園児：43名（大班22名、中班21名）、教員：3名（1983年10月時点での予定数）
1984	園児：45名+α、教員3名（1983年10月時点での予定数）
1993	運動場を修復し、全天候型運動場となる
1997	創立100周年記念の祝典が行われる
1998	獅子舞練習開始。第1期中國民藝獅子舞大會開催（主催：横浜中華保育園）
2001	百周年記念誌を発行
2004	獅子舞通年授業開始。中華民国政府が幼稚園へ15頭の幼児用獅子を寄贈
2006	中華民国政府が幼稚園へ16人用の籠を寄贈。これ以降、幼稚園・保育園ともに4歳児は獅子舞、5歳児は龍舞を学ぶことになった。この年より、幼稚園も龍舞・獅子舞で雙十節のパレードに参加。
2007	創立110周年記念の祝賀晩会が行われ、記念誌が発行される。園児：35名、教員：5名
2010	保育園の4・5歳児クラスが廃止になり、幼稚園が保育園のクラス名である幼獅班・華龍班の名を引き継いだ
2013	幼稚園が3歳児クラス新設。3歳児クラスを華青班、4歳児クラスを華獅班、5歳児クラスを華龍班と改めた。4月より、華青班は手作り獅子舞、華獅班は幼児獅子舞、華龍班は幼児龍舞という学習の流れを確立した
2016	園児：80名（華青班：24名、華獅班：24名、華龍班：32名）、教員：9名（園長含む）
2017	本校創立120周年記念園遊会と祝賀大會と祝賀晩会が行われる
2020	12月、新校舎竣工予定
2021	横濱中華保育園と合併し、「幼保連携型認定こども園」として新規開園予定（暫定定員数165名）

注：提供資料（『民国六十年～民国七十二年園児推移』、『我們的舞龍舞獅』及び『創校百十週年紀念特刊』）、横濱中華學院 HP（<http://www.yocs.jp/YOCS/japanese.php>）をもとに作成。

横濱中華學院幼稚園部の教育目標としては、「健康で安全な日常の基本的な生活習慣や態度を養い、身体諸機能の調和と発達をはかる」、「人の話を集中して良く聞き行動できる子どもに育てる」、「豊かな心情を養い思いやりのある子どもに育てる」、「明るく創造性に富んだ、個性豊かな子どもに育てる」の4点が掲げられている<sup>3)</sup>。また、下記の教学特色に示されているように、日本語、中国語、英語の「年齢に応じた語学教育」や、「台湾獅子、南獅子舞・龍舞に親しむ」ことで中華文化を体験・継承することのできる教育プログラムが用意されている。

#### 教学特色

- ・年齢に応じた語学教育
  - 中国語・英語は本校専任講師が担当します
  - ゲームや歌などを通して楽しみながら語学力が身につきます
- ・心身共に健康で伸び伸びとした子どもを育てる
  - 年間を通しての体操指導やお友達との遊びが体力づくりにつながり、同時に規律を学び助け合う心を養います
- ・台湾獅子、南獅子舞・龍舞に親しむ
  - 本園の最大の特色とも言える獅子舞・龍舞を学びながら表現力を高めます
  - 豊かな感性と協調性・創造性を育みます
- ・本園は栄養面を十分考慮した給食を週4回実施

#### 4.1.2. 多文化状況

【園・保育者】まず、横濱中華學院幼稚園部には3歳児から5歳児までの子どもが在園しており、3クラスがある。クラス名は中国語で名称がつけられており、華青班（3歳児）、華獅班（4歳児）、華龍班（5歳児）となっている。園内において、園児は名（下の名前）の中国語読みで呼ばれており、同じ名の場合はフルネームとなる。先生は「老師（lǎo shī）」と呼ばれている。各クラスには日本語を話せる先生と中国語を話せる先生が1名ずつ配置されており、主任と副主任はフリーで、延長保育も担当している。延長保育は、17時までは幼稚園の教室で、17時以降は隣接する横浜中華保育園に移動し行っている。

先生の構成を見ると、日本出身が4名、台湾出身が4名となっている。日本出身の先生はすべて「純日本人」であるが、そのうち2名は中国語で日常会話ができるレベルにある。他の先生も中国語の聞き取りや簡単な単語の使用は可能である。園長は横濱中華學院の学校長が兼務しているため、日常的な教育活動の方針は現場の先生が決定している。3クラス合同の会議は月1回開催されるが、各クラスの活動はペアの先生たちがクラスの状況に合わせてレベルを調整している。中国語での活動はおもに台湾人の先生が担当し、教材の作成も行っている。日本語のワークは市販のものを使用している。

現在、園内での子ども同士の会話は日本語が多いが、日常的に中国語が飛び交う環境であり、

日本人の先生も中国語を覚えていかなければならない状況となっている。そのため、日本人の先生は中国語を独自に学習したり、先生相互に言葉を教え合ったりしている。ただし、幼稚園での教育やしつけは台湾式でも日本式でもなく、日本と台湾の「ミックス」、「いいとこ取り」のような内容だと先生たちは語る。例えば、台湾の幼稚園ほどには勉強重視ではないという。

しかし、以前は日本人の先生が多く、中国語を話せるのは中華學院卒の先生 C のみだったようである。授業の時間のみ中国語で、ほとんどの子どもたちは日本語を中心に園生活を送っていた。入園に際して日本人枠も限られていた。園内で中国語の使用が主となってきたのは、台湾の幼稚園視察時にスカウトした副主任 A が同園で勤務するようになった 2011 年頃からだという。中国語の授業が巧みな先生（副主任 A）が入ったことで、子どもたちの中国語の習得が促進されたため、これを機会に教育活動内容を変え、中国語が話せる先生を採用するようになった。そして、現在のように 1 クラスに 1 名は中国語が話せる先生を配置する体制となった。また、2013 年以降は、4・5 歳児クラスに加えて 3 歳児クラスが新設され、3 年保育体制となった。

同園の教育プログラムとしては、中国語、英語、伝統文化（龍舞・獅子舞）、体操の授業がそれぞれ週 1 回ある。いずれも園の先生ではなく、園外から講師を招いている。中国語や英語は会話中心で、ワークなどはしていない。また、龍舞や獅子舞の練習成果は、お遊戯会や敬老会で発表したり、地域のイベントに呼ばれて披露したりする機会がある。特に龍舞の発表が多いという。さらに、月餅、ちまきを食べる日、七五三、日本のお正月、台湾のお正月など、台湾や日本の文化を体験する行事も数多く用意されている。台湾出身の先生（特に副主任 A）が台湾の最新の教え方（お絵かきやパズル）を随時取り入れて来たりするなど、台湾と日本の文化をよりよい形で知ることができるように工夫をしている。それ以外にも、同園の卒園生が通っている近隣の公立小学校の 1 年生と 5 歳児クラスの園児で交流会を開くことなどがある。

**【子ども・保護者】** つぎに、子どもや保護者の文化的背景を見ておこう。提供資料によると、園児 80 名のうち、両親日本人が 47.5%、両親中国・台湾人が 17.5%、父母一方が中国・台湾人が 30.0%、その他 5.0% である（2016 年 9 月時点）。入園希望者は増える傾向にあり、保護者の子どもに対する中国語習得への期待は高いという。ただし、同園に入園を希望する理由は様々である。例えば、中国や台湾から日本に来たが日本語が話せないため、先生と中国語でコミュニケーションがとれる園に入りたいと考える中国・台湾人の保護者、中国語は家庭で教えるため園では綺麗な日本語を身に付けてほしいが、中国語も日常的に使う園に入りたいと考える中国・台湾人の保護者、子どもに英語や日本語だけでなく中国語も使えるようになってほしいと考える日本人保護者、龍舞や獅子舞など伝統文化に魅力を感じ入園を希望する日本人保護者、横濱中華學院への進学を見据え、しつけや勉強面を重視して隣の横浜中華保育園などから途中入園させる保護者などがある。周辺地域在住の家庭が多いが、東京や川崎など遠方から子どもを通わせている保護者もいる。また、入園が決まり別の地域から（母子のみ）引っ越して来る場合もある。子どもの将来を考えて、出産後すぐや妊娠中でも幼稚園探しの問い合わせをしてくる保護者もいる。なお、入園に際しては、知育試験（集団行動の観察など）と親子面接がある。

では、このように多様な理由のもとで通園してくる子どもたちの様子はどうかだろうか。先生たちの語りによると、入園当初、3歳児クラスでは子どもたちの間に壁があり、日本語しか話せない子ども同士、中国語しか話せない子ども同士で遊ぶことがしばしば見られる。しかし、徐々に日本語が話せるようになっていく中で関係性が変わっていくようである。

4歳児クラスでは、中国語が話せるかどうかにかかわらず、気の合う子どもたちで遊んでいることが多いという。中国語しか話せない子どもでも、気が合う仲間なら、日本人の子どもたちの中に入って徐々に日本語を吸収していく場面も見られる。4歳児クラスだと、教室の中で使う言葉の聞き取りはほとんど問題ない子どもが多い。ただ、年少時よりも日本語の語彙が増え、言いたいことが出てくるが中国語で自分の気持ちを伝えるとなると上手く話せず、日本人の子どもが中国語に苦手意識を持ってしまう時期でもあるという。例えば、子どもが「好吃(hǎo chī)」と中国語で言った時、「じゃあどんな風においしいか言える？」と先生が日本語で聞いても、中国語ではまだ表現できないという。

一方、保護者間の関係はどうか。最近では母親の3分の1以上がパートなどで仕事をしており、延長保育に子どもを預けている場合が多くなっている。延長保育に子どもを預けている親同士、主婦の親同士で交流が分かれることはあるが、中国・台湾人か日本人かで分かれることはなく、お互いの文化を教え合ったりしている様子も見られるという。運動会、お遊戯会、春の親子遠足など保護者が参加する行事はそれほど多くないが、保護者間での結束は強い傾向にあり、クラスによってはパパ会が組織されている。

#### 4.1.3. 多文化状況への対処

それでは、このような多文化状況の中で、保育者はどのような問題に直面し、それに対処しているのだろうか。日常的な子どもや保護者との関わりにおいて、食文化（保温など）や子育て文化（服装、厚着、お風呂など）、マナー（遅刻など）の面で中国・台湾と日本では違いがあり、日本人の先生たちが驚くこともあるが、一番対応が難しいのは言葉に関わることであるという。

子どもの言語面に関しては、新しく3歳児クラスに入ってきた子どもの場合、まだ言葉が十分に話せないため、何語が通じるかさえ分からないことがある。他方、3歳児ではあまりないが、4歳児クラスになると、中国語が話せる子どもが大きな声で発言したり、他の子どもを傷つけてしまうような発言をしたりして、話せない子どもが自信をなくしそうになる場面がある。その時は子どもの考え方や行動が変わるように先生からフォローを入れている。さらに、子ども同士がケンカをした際、4歳児ぐらいになるとその理由も複雑になるため、台湾人の先生が子どもの日本語での説明を上手く理解できないしていると、同じクラスの日本人の先生が代わりに対応することがある。また、中国語が上手く話せないジレンマや家庭でのストレスなどで爪かみをする子どもがいるため、保育者として働く中で何が原因かを見極めていく必要があるという。

それに加えて、クラスの中には日本語をさらに学ばせたい中国・台湾人の子どももいれば、中国語を学ばせたい日本人の子どももいるため、いかにバランスよく二言語を使って教えるかに難しさを感じると先生 A は語る。クラスでは日本語と中国語を並行して話すよう意識しているが、



中国語をもっと伸ばしてほしい子どもには中国語で、日本語をもっと上達させてほしい子どもには日本語で話しかけるようにしている。そのために、例えば4歳児クラスでは、毎月あるテーマ（例えば、洋服、スポーツ）についてイラストが書かれたカードを机の上に載せておき、子どもたちをグループ分けして、そのカードに書かれた内容を中国語で何と言うか当てるゲームをするなどの工夫をしている。そしてその際、各グループに必ず中国語を話せる子どもを入れて、お互いに助け合い刺激し合いながら単語を覚えられるように子どもの配置調整を行っている。

しかし、基本的に子どもへの対応は、文化や言語の違いよりも個々の性格や特性などに合わせて行っているという。園では日本語、中国語、英語も学ぶが、子どもたちはあまり混乱せずに言語を使い分けており、例えば、日本人の先生には日本語で、台湾人の先生には中国語で話しかけるなどしている<sup>4)</sup>。

一方、保護者との関わりについてはどうだろうか。同園では中国語を話せる先生が多く、保護者への配付物（毎月のおたよりなど）は中日二言語で書かれるため、中国語しか話せない保護者とのコミュニケーションで困ることは少ないという。ただし、コミュニケーションのとり方に文化の違いがあるため、台湾人の保護者には台湾人の先生が、日本人の保護者には日本人の先生がフォローをしている。また、園での子どもの様子を伝えるために、毎日園で行った活動内容や連絡事項（覚えた歌、明日の体操服・お弁当準備の確認など）をノートに書き、保護者向けに掲示している。中国語が話せない日本人の保護者もそうした情報をもとに歌を YouTube で調べるなどして、家庭で子どもと一緒に復習したり覚えたりできるようにしている。保護者の希望に応じて、家庭で子どもの中国語の発音を録音してきてもらいチェックすることもある。さらに、中華圏につながるのある家庭であってもほとんどの子どもは家庭で日本語が中心であるため、中国語の上達が進むように／中国語を忘れないように、中国語を意識的に使うよう保護者にアドバイスをすることもある。

## 4.2. 認可幼稚園 熊猫（パンダ）幼稚園

### 4.2.1. 園の沿革と教育の特色

熊猫（パンダ）幼稚園は横浜市中区吉浜町にある認可幼稚園であり、学校法人横浜山手中華学園が運営を行っている。大陸（中華人民共和国）系である同学園は横浜山手中華学校も設置しており、園と学校は同じ建物の中に位置している。また、後述するように、熊猫（パンダ）幼稚園は、2010年に認可園となる以前は横浜山手中華学校幼稚部であり、現在でも園児たちの大半は卒園後に同校小学部へ進学している。調査時点での教職員数は13名、園児の定員数は98名である。園の沿革は表4の通りである。

熊猫（パンダ）幼稚園の教育方針としては、「自分の力で考え、積極的に行動できる子どもに育てます」、「友達を大切に、思いやりのある豊かな心の子どもの育てます」、「いろいろな体験・活動を通して、豊かな個性と感性を育てます」、「心身ともに健康で明るく、元気に満ちた子どもに育てます」、「日本と中国の文化に育まれた国際性のある子どもに育てます」の5点が掲げ

られている。保育内容は、7つの観点から、「遊び：充実した環境の中で、子どもたちは十分に体を動かし、いろいろな遊びを取り入れています」、「健康：バランスのとれた体力向上をめざし、専門講師による体操指導を行っています」、「表現：中国と日本の音楽・造形・絵画や劇遊びなどの表現活動を行っています。専門講師によるリトミックを行っています」、「言葉：絵本読みや会話遊びで正しい言葉の指導を行っています」、「人間関係：いろいろな活動を通して、友達を大切に、協力して行動できるよう指導を行っています」、「環境：動植物などの自然観察を行っています」、「幼小連携：小学校との連携と交流を行い、教育の連続性をはかっています」とまとめられている<sup>5)</sup>。「音楽・造形・絵画や劇遊びなどの表現活動」を通じて、「日本と中国の文化に育まれた国際性のある子ども」の育成に取り組んでいるところに同園の特色があるといえる。

表4 園の沿革（認可幼稚園 熊猫（パンダ）幼稚園）

年	
1946	新校舎が落成し、校名を「横浜中華小学校」と改め、標準語（北京語）による授業を開始。
1947	「幼稚園」及び「中学部」を増設し「横浜中華学校」と改名。
1948	「成人クラス」及び「児童クラス」を増設し、生徒数は1000名余りに達する。
1951	「横浜中華学校校友会」創立。
1952	人災により学校は分裂に追い込まれ、暫時多数の僑胞の家に分散して授業を行う。
1953	山手町に臨時校舎建設。 校名を「横浜中華学校山手臨時校舎」とし、600名余りの生徒がここに移転して授業を続けた。
1957	山手町の臨時校舎を「横浜山手中華学校」と改名。
1959	横浜山手中華学校の校章及び校歌を定める。
1966	地上5階建て鉄筋コンクリート造の校舎が落成。 神奈川県からの認可を受け、「学校法人 横浜山手中華学園」となる。また、学園理事会が発足。
1967	高等部を増設。
1982	高等部を廃止し、幼稚部、小学部、中学部の教育に重点を置く。
1983	中国からの教師招聘を再開。
1993	教育改革に着手。
1994	コンピュータ教室を設置。
1998	学校創立百周年の祝賀行事を行う。
2008	胡锦涛国家主席が本校を訪問。
2010	吉浜町に新校舎を建設し移転。「熊猫（パンダ）幼稚園」設立。
2016	幼稚園6クラス、小一3クラス、小二～中三それぞれ2クラス、全校25クラス編成となる
2018	学校創立百二十周年

注：提供資料（『横浜山手中華学校校史 Since 1898』）、横浜山手中華学校 HP（<http://www.yycs.jp/school/history/history.html>）をもとに作成。

#### 4.2.2. 多文化状況

【園・保育者】まず、熊猫（パンダ）幼稚園には3歳児から5歳児までの子どもが在園しており、計6クラス（各学年2クラス）がある。クラス名は星星一班／二班（3歳児）、彩虹一班／二班（4歳児）、太陽一班／二班（5歳児）である。

教職員は園長含め13名である（2016年時点）。先生は10名で、うち中国人6名（中国本土出身4名、日本生まれの華僑2名）、日本人4名となっている。華僑の先生のうち1名と職員2名は中華学校卒業生である。本園は認可園であるため、中国出身の先生であっても日本の養成校で幼稚園教諭の資格を取得している。

2010年に認可園へ移行する以前、本園は横浜山手中華学校の幼稚部であった。横浜山手中華学園全体の新校舎への移転に際して、認可園としての認可を取得し、行政からの補助金を受けて幼稚園の経営を始めた。附属園時代は4・5歳児の2クラスのみしかなく、園児数は60名程度であったが、現在は計6クラスにまで規模を拡大し、106名の園児が在籍している（2016年時点）。

熊猫（パンダ）幼稚園が開園した当初は、附属園（「山手」）時代の先生が続けて勤務しており、クラス数も3クラスのみだった。また、開園から2年目までは、同じ学園である中華学校の校長が園長を兼務していた。しかし、学園の規模が拡大する中で園長の兼務が難しくなり、3年目から園長Bが園長を引き継ぎ、「新たな幼稚園」としての方針を固めていった。附属園時代は、学校の一部だったため、幼稚園としての方針は特になかったという。現在も園の方向性については模索中であり、園長を中心に教職員たちで議論している。また、園長をはじめ、先生たちは積極的に園外での研修会に参加している。なお現在、附属園時代からの先生は数名しかない。

園児の大多数は日本で生まれた華僑・華人の子どもと中国から来た子どもであるが、園の教育方針としては、まず今後日本で生活していく上で基本となる正しい日本語を覚え、日本の文化（マナー、習慣）を身に付けてほしいと考えている。また、中国と日本の文化を伝える上で、年少、年中、年長それぞれに、中国出身の先生と日本出身の先生を1名ずつ配置するよう調整しており、両者がクラスを行き来し、中国と日本の文化をバランスよく体験できる工夫をしている。

園内での日常会話は基本的に日本語で行われているが、子どもたちは日常会話の中で挨拶（「早上好（zǎo shàng hǎo）」など）や数え方、日にちなどを中国語で覚えていく。日常の活動では、書くことではなく劇遊びや歌、絵本の読み聞かせを通じて、自然と言葉を学べるような環境作りを目指している。加えて、週に1回、中国語の時間がある。学年ごとに、一方のクラスでは中国人の先生が中国の言葉や歌、遊びを、もう一クラスでは日本人の先生が日本の言葉や歌、遊びを教える。保護者から英語教育のニーズもあるが、幼稚園ではまず中日の文化を遊びの中で学んでもらえれば十分だと考えていると園長は語っている。

また、子どもたちに多くの行事を通じて様々な体験を提供することで、中日の文化や習慣を学ばせると同時に、子ども同士の協力関係を育てている。おもな行事としてはお節句、春節での餃子作り、国慶節、節分の豆まき、餅つき、スイカ割り、獅子舞、芋掘りなどがある。さらに、近隣の日本の幼稚園とも七夕の日の近くに子ども同士の交流会を行っている。

**【子ども・保護者】** つぎに、園児や保護者の文化的背景について見ていこう。園長によると、周辺地域には多くの華僑・華人の子どもが生活しており、同園への入園希望者も多い。在園児については、国籍は日本で両親どちらかが日本人である華人の子どもが6割を超えるという。国籍が中国で両親とも中国人の子どもは以前と比べて減少しているようである。また、両親日本人の子どもは数名しかいない。ただし、子どもの文化的・経済的背景については、近年、個人情報観点から書類上での把握が難しくなっており、子どもや保護者との日常的な会話の中でのこれらの背

景を知ることが多くなっていると園長は語る。

このような周辺地域における中華圏とつながりのある子どもの増加に伴い、同学園では、以前は入園・入学の優先順位を設けていなかったが、現在は園も学校も在園・在校生の弟妹あるいは卒業生の子弟を優先して募集するようになってきている。新入園生のほとんどは優先枠で定員が埋まってしまうため、現状として一般募集の枠がかなり限られてしまっているという。その中で、僅かだが周辺地域の日本人の子どもも希望があれば入園させている。その他、親が送り迎えし東京から通う子ども、入園が決まり遠方から引っ越してくる子どもや保護者も数名いる。なお、5歳児クラスの園児の大半は卒園後に横浜山手中華学校に進学している。

では、そうした日本生まれの華僑・華人の子どもが多い環境において、子どもたちはどのような様子で生活しているのだろうか。園長によると、日本語が話せない子どもが友だちの輪になかなか入れない場面は一時ある。また、中国語を話せる子どもが他の同じような子どもとしか遊ばない場面もある。しかし、子どもの成長は早く、中国から来たばかりの子どもでも3ヶ月もかからないうちに周りの子どもたちと日本語のような幼児語を使って会話ができるようになるという。日本で生まれても家庭で中国語しか話さない子どももいるため、国籍ではなく家庭での過ごし方が、子どもの園での友だち関係に多少の影響を与えていると園長は推測している。

他方、保護者間、保護者－保育者間での交流はどの程度あるのだろうか。園長によると、園の行事はなるべく土曜日に開催し、保護者も参加しやすいようにしている。また、1学期に必ず1回はクラスの保護者会を開催している。保護者会主催で、保護者同士のランチ会も定期的に行われており、参加率は90%程度と高いという。その他、保護者会で工場見学や講座の機会を設けるなど、保護者同士の交流は盛んに行われている。保護者会の役員会は月1回である。ただし近年は、仕事の関係で保護者会の役員（「理事」）を引き受けられない保護者も多くなってきている。しかし、運動会、芋掘り、春・秋の遠足など園の行事の際、教職員だけでは手が足りないため、例えば運動会の時の受付や道具係などを保護者会役員にも手伝ってもらっている。

#### 4.2.3. 多文化状況への対処

このように日本生まれの華僑・華人の子どもだけでなく、新たに中国から来た新華僑の子どもも在園している状況の中で、どのような問題が生じているのだろうか。また、保育者はそれに対応できるように対処しているのだろうか。園児に関しては、入園したばかりで日本語が話せない子どもの場合には面倒を見る子どもを1人か2人あてがっていると園長は語る。調査時点でも9月に3名転入の子どもがおり、各クラスに面倒を見る子どもをつけている。子ども同士手をつないで一緒に遊びに行くなど、すぐに仲良くなっているという。

保護者に関しては、保育者たちが保護者の使用言語に合わせ臨機応変に対応しているため、保護者とのコミュニケーションにおいて特段大きな問題は生じていないようである。また、保護者には日本語が分からない者、あるいは中国語が分からない者もいるので、何かお知らせがある場合は、連絡帳でのやりとりではなく直接会って話すか電話をしている。さらに、保護者会の役員会に園長と主任の先生が出席し、保護者からの要望等があれば聞き、必要な場合は改善するよう

にしている。例えば、毎日お弁当のため各部屋に温蔵庫を置いてほしいという要望があり、保護者会からの寄付で設置した。ただし、中国と日本ではマナーや習慣に違いがあり、例えば中国から来た保護者の中には、毎月1回お知らせのおたよりを園が配っても、行事予定などを見落とししてしまう場合もある。

### 4.3. 認可保育所 保育園小紅

#### 4.3.1. 園の沿革と教育の特色

保育園小紅は横浜市中区吉浜町にある認可保育所であり、横浜山手中華学校や熊猫（パンダ）幼稚園が入る建物の一階部分に園舎がある。園の運営は一般社団法人横浜華僑小紅の会が行っている。表5（園の沿革）に示したように、同園は1967年に横浜山手中華学校学生宿舎にて小紅託児所として開設され、翌年婦女会付属の託児所として中華街の中の公園の一角に移転し、その後長年に渡り、地域の働く女性たちのために、おもに華僑の子どもたちの保育を担ってきた。1997年には横浜市から「横浜保育室」の認定を受け、園名も「小紅託児所」から「保育園小紅」へと変更された。そして、2015年には低年齢児保育所に変更し、2017年には園舎を中華街（山下町）から吉浜町の建物の一角に移行し現在に至っている。調査時点での教職員数は14名、園児の定員数は33名である。

保育園小紅が掲げる保育理念は、「子ども、保護者、職員がともに育つことを大切にして、地域に根差した保育を行います」及び「午前中、乳児は外気浴、幼児は体を使い外で思い切り遊びます」であり、保育目標は、「中国と日本文化を継承し、遊びの中で体を鍛え、国際性、社会性を身につけ、感性豊かで思いやりのある子に育てます」である。遊びを中心とした保育の中で、中国と日本の文化を体感できることに特色があるといえる<sup>6)</sup>。

#### 4.3.2. 多文化状況

【園・保育者】まず、保育園小紅には0歳児から2歳児までの子どもが在園しており、3つのクラスがある。クラス名は中国語で名称がつけられており、小鶏（0歳児）、小白兔（1歳児）、小花猫（2歳児）となっている。なお、以前は3歳児も受け入れていたが、熊猫（パンダ）幼稚園が横浜型預かり保育を開始したことで、先述のように、低年齢児保育に移行している。

同園は認可園であり、保育士として勤務するには日本の保育士資格が必要となるため、教職員のほとんどは日本出身で中国語を話せない。ただし、中華学校と何らかの関係がある職員は多く、中華学校卒業生も数名含まれている。例えば、園長は、横浜山手中華学校に幼稚園から高校まで通っており、以前は同校の幼稚部で勤務していた経験を持っている。また、元園長である理事長も同校の小・中学部卒業生である。

保育プログラムとしては、行事の一環として、龍舞・獅子舞、太鼓を使った舞踊など中国の伝統文化を体験し披露できる機会を設けている。また、中国の歌も通常の保育活動に取り入れており、子どもたちは園生活を通じて20曲ほど歌えるようになると園長は語る。

他の中華系幼稚園・保育所との交流については、熊猫（パンダ）幼稚園や近隣の横浜中華保育

表5 園の沿革（認可保育所 保育園小紅）

年	
1966	託児所設立発起人会発会
1967	小紅託児所開設（横浜山手中華学校学生宿舎にて） 園児：3名～5名
1968	婦人会付属として中華街に移転 園児：13名
1969	園児増加（人材不足） 園児：20名
1970	保育の質的向上めざす（資格取得、学習経験交流）
1972	中日国交正常化 園児：30名
1974	市援護費受給申請 園児：31名
1975	婦人会館落成（1階使用） 園児：28名
1977	設立10周年（記念文集発行） 園児：32名
1979	第1回バザー（朝市） 園児：36名
1980	市は児童福祉審議会の答申にもとづき無認可保育園を地域保育室とする
1981	飯田宅にて0才保育 園児：37名
1982	設立15周年（記念講演会・記念ビデオ作成）
1983	園児増加 園児：44名
1987	設立20周年（文集発行、母と子の展覧会を校友聯歡会に合わせて開催） 園児：35名
1990	関帝廟落成（関帝廟通り門落成テープカットを中華保育園と共同で行う）
1994	園児数減少傾向（存続議論、女性の活動の火を消さない） 2000年までのシュミレーション作成（25～30名のニーズがあれば採算可能という見通しを立てる） 園児：15名切る
1997	小紅の会設立（発起人11名） 園の名称は小紅託児所から保育園小紅へ 横浜市の認定を受け横浜保育室となる 園児：36名
1998	小紅の会会員募集（2002.9現在の会員数80名） 園児：35名
1999	小紅の会総会開催・会芳楼完成小公園整備 園児：34名
2000	仮保育室（10ヶ月） 園児：29名
2001	一階保育室使用（定員25名） 就業規則整備 園児：24名
2002	大熊猫 譚家1階で保育 関帝誕参加 園児：20名、15名
2015	3歳児クラスをなくし、低年齢児保育所に移行
2017	横浜市認可保育所として現在地に移転開園

注：提供資料（「保育園小紅リーフレット」及び『保育園小紅設立三十五周年記念文集』）、聞き取りをもとに作成。

園と前園長の時代から情報交換をしたり、保育見学を行ったりしている。

【子ども・保護者】 つぎに、園児や保護者の文化的背景について説明する。現在、保育園小紅には新華僑の子どもたちが数多く通っている。両親日本人の子どもは少なく、中国につながるのある保護者や子どもが多くなっており、老華僑と新華僑の保護者の比率はおおよそ1:2である。子どもに少しでも中国語を覚えさせたい、将来中華学校へ入学させたいと考える保護者が出願してきていると園長は推測している。

特に認可園移行後、中国につながるのある子どもの入園が増加していると園長は語る。認可園への移行については、同園がこれまで老華僑の人々の支えによって成り立ってきたという経緯があるため議論があったが、園の財政的安定のためには必要であると判断され申請に至った。認可園移行以前は、中華街の華僑の子どもを中心に欧米や韓国、インド、フィリピンなどとつながりのある子どもも通っていたようである。ただし、地域の華僑の人々、特に女性たちが力を合わせて立ち上げ運営してきた園であるという特徴は創設から50年間経った今も変わらないと、長年保育園小紅に関わってきた理事長は語っている。

#### 4.3.3. 多文化状況への対処

このように、保育者のほとんどは中国語があまり話せないが、在園児に占める新華僑の子ども

の割合が高まっている状況において、何か問題は生じているのだろうか。

園長や主任保育士によると、新華僑の保護者や子どもと接する際、服装、食事、マナーなどの点で、中国と日本での子育て文化の違いを実感することがあるという。しかし、そうであっても、特に大きな問題は生じておらず、保育者は子どもや保護者の背景を受け止めながら、それぞれに対応をするようにしているようである。

また、保護者と中国語での対応が必要な時は中国語が話せる園長が手伝うこともある。しかし、たとえ保育者が中国語を話せなくても、保護者が中国語で書いたノートの読み取りはできるし、保護者の側も日本語を覚えるよう努力している場合が多いようである。さらに、保育者側も、園生活を送る中でいくつか中国語の単語を日々使用するため、子どもと一緒にそれらを使っているうちに、中国語の単語や歌を少しずつ覚えていくようである。

さらに、園児は低年齢児で言葉の覚え始めの段階であり、長い文章での会話は少なく、2～3語文のため、保育者が言葉の面で対応に困ることはほとんどないという。

#### 4.4. 認定こども園 神戸華僑幼稚園

##### 4.4.1. 園の沿革と教育の特色

神戸華僑幼稚園は神戸市中央区中山手通にある幼稚園型認定こども園であり、学校法人神戸華僑幼稚園が運営を行っている。同園は大陸（中華人民共和国）系の神戸中華同文学校と隣接しており、両者は歴史的に密な関係を築いてきた。表6（園の沿革）に示したように、神戸華僑幼稚園は1952年に神戸中華青年会附属幼稚園と光華幼稚園が合併し開設された園であり、長年にわたり地域の子どもたち、特に華僑の子弟の育成に尽力してきた。2014年に県から、2015年に市から認定を受け、現在は幼稚園型認定こども園として、1号認定児、2号認定児の受け入れを行っている。調査時点での教職員数は15名、園児の定員数は160名である。

神戸華僑幼稚園の教育・保育の目標は、「バランスのとれた徳育・知育・体育を目指す」、「自主独立の精神を養う」、「国際親善・世界平和に寄与できる国際感覚を養う」の3点である<sup>7)</sup>。また、園の特色としては、「遊びを中心とし、のびのびと楽しく、さまざまな活動を経験させる」、「活動の中で、力を合わせる大切さ・相手を思いやる優しい心・辛抱強く頑張る強い心・強い身体を育てる」、「保育の中に、中国の文化・簡単な中国の歌・遊び・言葉・お話を取り入れている」、「子ども達が将来、国際的な視野を持ち、国際親善・世界平和に役立てるよう育てる」の4点が掲げられている。子どもたちが日常の園生活を通じて中華文化を体験し、国際性を身に付けることができる環境を用意していることがわかる。

##### 4.4.2. 多文化状況

【園・保育者】まず、認定こども園神戸華僑幼稚園には3歳児から5歳児までの子どもが在園しており、各学年2クラスの計6クラスがある。クラス名は桃組・梅組（3歳児）、蘭組・菊組（4歳児）、松組・竹組（5歳児）である。

教職員15名のうち、神戸華僑幼稚園卒園生、神戸中華同文学校（中学部）卒業生がともに10

表6 園の沿革（認定こども園 神戸華僑幼稚園）

年	
1952	神戸中華青年会附属幼稚園（1950年設立）と光華幼稚園（1951年設立）が合併し、神戸華僑幼稚園となる
1954	準学校法人取得
1960	現在地（神戸市中央区中山手通6丁目4-20）に新園舎竣工
1961	学校法人取得
1974	園舎2階を増築。保育室を増やし、3年保育を開始する
1993	総合遊具設置
1997	預かり保育を開始
2000	創立50周年の記念事業として、園舎及びホールを改築
2004	夏期預かり保育を開始
2007	冬期預かり保育を開始
2011	早朝預かり保育を開始
2012	二歳児子育て応援事業を開始
2014	幼稚園型認定こども園認定（県）
2015	子ども子育て支援新制度開始 幼稚園型認定こども園認定（市）。新園舎建て替え工事
2016	新園舎竣工。大型総合遊具設置

注：提供資料（『2018年度入園案内』）をもとに作成。

名と多い。園長先生も神戸華僑幼稚園及び神戸中華同文学学校出身者である。また、神戸華僑幼稚園・神戸中華同文学学校卒業生の演奏家が講師としてピアノを教えに来ている。神戸中華同文学学校出身者など中国語が話せる先生は、日常の保育場面で、例えば、「加油、加油（jiā yóu, jiā yóu）」（松組担任）、「じゃあみなさん、坐下（zuò xià）、座って下さーい」（体育の先生）、「謝謝（xiè xiè）」（主任の先生）など、中国語の単語を使って子どもたちに話しかけている。

園内において、先生は「老師（lǎo shī）」、園長は Yuán zhǎng と中国語で呼ばれている。ただし、筆者の観察では、家庭での保護者の呼び方に影響を受け、「老師」ではなく「先生」と言う子どもも見られた。年長児の場合は「老師ね」となすが、年少児の場合は特には正さないという。他方、子どもの名前は家庭での愛称で呼ぶようにしているが、先生や状況によって呼び方が違う場合もある。

朝礼（全体）での挨拶（「老師 早、小朋友 早（lǎo shī zǎo, xiǎo péng yǒu zǎo）」）、各クラスの朝の会での挨拶・出席、昼食時の挨拶などでは中国語が用いられている。園で日常的に使用する中国語の単語については、長年の保育実践の蓄積の中で「中国語教育課程」として資料にまとめられており、教員間で共有されている。各クラスの活動では、日本語だけでなく中国語の歌も取り入れており、歌詞に出てくる中国語の単語の意味を子どもに教えたりしている。各学年で何月にどういった歌を取り入れるかは長年受け継がれてきたものがある。例えば、中国語で作った、園歌、朝の歌、帰りの歌、お誕生日会の歌、運動会の歌などがある。新しい中国語の歌も随時取り入れている。

さらに、2017年からは、毎週水曜日の午前に全園児を集めた「中国語の時間」を設けている。この時間は中国で幼稚園教諭の経験がある中国人の先生が担当しており、中国語の歌遊びをしたり、中国語の単語（果物、動物、季節、数字など）をパネルシアターなどを使って少しずつ覚えさせたりしている。担当の先生は基本的には中国語で、ところどころ日本語で園児に教えている。



ただし、園での日常的な活動は日本語を主として行われており、筆者が見学時に練習を行っていた遊芸会での劇の台詞も基本的に日本語で、人数を数える時（1、2、3、4、5）や「謝謝」など簡単な言葉のみを中国語としていた。

地域との交流としては、年長組が毎年南京町で開催される春節祭に参加し中国舞踊を披露するなどしている。

**【子ども・保護者】** つぎに、園児や保護者の文化的背景を確認しておこう。調査時点では、園児137名のうち、両親日本人が27.0%（37名）、両親どちらかが中華系が41.6%（57名）、両親中華系が31.4%（43名）である。両親中華系の場合、その多くは新華僑である。こうした新たに中国から来た新華僑の子どもが10年ほど前から増加傾向にある。さらに、保護者が神戸中華同文学校出身かどうかに限らず、インターネットで園のことを調べて、大阪や海外（シンガポール、アフリカなど）から面接を受けに来る家庭もある。1号認定児の新入園の受付は一般枠と卒・在園生枠に分かれているが、どちらも同様に親子での面接等を行っている。2号認定児の新入園に関しては、本園と連携している神戸市小規模保育施設から10名を優先的に入園させている。ただし、子どもの様子等を把握するために親子での面接等を事前に行っている。2号認定児では華人の子どもが多いが、新しく中国から来た新華僑の子どもも意外にいと園長は語る。

また、保護者あるいはきょうだい神戸中華同文学校の卒業生である子どもは、全体の38.7%（53名）である。なお、例年、年長クラスの子どものうち、6割前後が卒園後に神戸中華同文学校に進学するという。ただし、本園は神戸中華同文学校と隣接しており相互交流は長年あるが、同校の附属園ではない。そのため、学校入学に際して本園出身による優先権があるわけではないが、神戸中華同文学校卒業生の子弟は第1次募集で考査を受けることができる。

園内での子どもの様子については、多くの子どもは日本語でのコミュニケーションに問題はなく、入園当初中国語しか話さなかった子どもも1年ほど経つと日本語が上達していくという。また、少数ではあるが、子ども同士の会話で日本語と中国語を器用に使い分ける子どももいるという。しかし、子どもによって個人差があり、中華圏につながりのある子どもで、家庭で中国語のため、園内でもかたくなに中国語のみを話し、3年間在園しても日本語がほとんど上達しない場合がある。ただそれだと他の園児とのコミュニケーションで問題が起きたりするので、子どもにとってはあまり良くないかもしれないと園長は考えている。

一方、保護者については、家長会（PTA）が基本的に全員参加となっており、家長はママ料理（月1回のお誕生会の日に昼食、デザートを調理）、親子学級、バザー等の活動のいずれかに参加するようになっている。バザーは地域に根付いた園として伝統的に開催してきたものであり、開園当初から続いている。こうした活動を通じて、保護者間の親睦を深め、園や子どもの様子を知ってもらおう機会にしている。

#### 4.4.3. 多文化状況への対処

先で述べたように、園での活動は基本的に日本語で進められるが、中国語しかわからない子どもには、中国語の話せる先生が個別に中国語で説明をする。また、中国語の話せる主任の先生や

園長が適宜補助として各クラスの活動に入っている。

3歳児クラス（年少）の場合、担任の一人が中国語を話せる先生、もう一人が若手で中国語が話せない先生だが、前者のクラスに中国語しか話せない子どもを入れ、後者に日本語のみか中日二言語がわかる子どもを入れるなど調整をしている。年少児では中日二言語で対応すると混乱する可能性があるため、保育者たちはその子どもに合わせて、なるべくどちらかの言語に統一して話すよう心がけている。ただし、年少の場合、中国語がわかる子どもは2クラス合わせても9名で、中国語しか話せない子どもは1名だけと少ない。それ以外は、母親が中国人で中国語がわかるが日本語も話せる子どもとなっている。そして、年少から年長に学年が上がるにつれ、中国語しか話せなかった子どもの多くが日本語を話せるようになる。また、中国語が主である保護者も、片言でも園の先生たちとやりとりする中で、日本語が上達していくという。

保護者への対応としては、毎月のおたよりなどは中日二言語で作成し配付している。また、保護者にも子どもの園での取り組みを知ってもらうために、毎月の園だよりの中で園児が覚えた中国語の単語をいくつか掲載し紹介している。また、保護者向けに中国語講座も開講している。

## 5. ま と め

以上、本稿では、日本における中華系幼稚園・保育所における多文化状況とその中での保育者による問題対処のあり方について、4つの園を事例に検討した。ここでは、おもな知見を保育者のストラテジーの観点からまとめ考察を加える。

第1に、どの園も中華文化の継承・伝達、国際性の涵養を教育・保育の目的の一つとしており、日常の教育・保育活動に中国語の単語や歌を取り入れたり、中国・台湾の文化を体験したりする機会を作っていることが示された。しかし、中国語に関してはどの園も会話を重視した内容であり、中国語での授業が主となる中華学校への準備教育としての側面はそれほど強くはない。一方で、どの程度中国語や中国・台湾の文化を重視した教育・保育を行うかにはヴァリエーションがあった。日本と中国・台湾の文化をどのようなバランスで体験させるかという園の教育・保育の方針は、園の歴史的経緯だけでなく、認可園であるか否かに関係する保育者の構成、中華圏とつながりのない純日本人の子どもの比率、保護者のニーズ等によって左右されると考えられる。特に横濱中華學院幼稚園部の事例で見られたように、各園の方針は、地域社会の多文化化といったマクロな変化に順応するためではなく、子どもにとってよりよい園環境を希求し、限られた資源である保育者の背景・特長を十分に生かした教育・保育の実現を試行錯誤した結果として、基本的な部分は保持されつつも柔軟に変容してきたのだと推測される。

第2に、園児の学年によって、生じる問題や保育者のストラテジーに違いがあることが明らかになった。品川（2017）は「外国人の子どもが日本の保育所に入所する場合、子どもの年齢が低ければ、言葉や生活習慣が違うことで園生活に慣れないという問題は起こりにくい」（品川 2017, p.64）と指摘しているが、今回の保育園小紅の事例でも、低年齢児では言語に関わる問題はあま

り起きず、対応も難しくないと保育者たちは考えていた。そのため、日本語がわからない子どもが入園してきたとしても、保育者たちは子どもの成長・発達の早さを前提とし、「見守る」基本姿勢でのストラテジーを中心に採用した保育実践を行っていた。横浜中華保育園の低年齢児クラスの事例（喜始・長江 2017）と類似した状況と問題対処の在り方を、同園と同じく認可保育所へと移行したことで新華僑の子どもの増加を経験している保育園小紅でも確認できた。他方で、3歳児以上の子どもに関わる問題に対して、園長を含めた保育者たちは、日本人－中国・台湾人の先生同士での協働ストラテジーを駆使し円滑に対処していることが共通して示された。さらに、園の状況によって工夫の仕方は異なるが、子ども同士の互助を促すために子どもの配置を変えたり、担任である保育者の負担を減らすためにクラスの園児の構成を調整したりすることで、言語面に関わる問題の発生を事前に抑えていた。保護者への対応についても今回の4事例では共通性が見られ、保育者たちは中国・台湾と日本の子育て文化の違いに当初戸惑いもするが、保護者の文化的背景や使用言語に応じて、保育者が役割分担をした問題対処を行っていた。このように園内に多様な文化的背景の保育者が配置されているのみならず、保育者同士、子ども同士、保育者－子ども間での互助を基盤として園内での問題対処が円滑になされる様子は、日本の多文化教育・保育の課題を克服する上で示唆的な点であると筆者は考える。

ただし、今回の調査データは保育者等の聞き取りを中心としたため、保護者側の視点が欠けている。また、紙幅の都合上、本稿では、日本における就学前多文化教育・保育の課題克服に向けた具体的な提案をするには至らなかった。今後さらに中華系幼稚園・保育所に関する調査を進め、各園の特徴を多角的に詳解した上で、多文化教育・保育に関わるモデルの抽出を試みたい。

#### 【謝辞】

各園の教職員・関係者の皆様には、ご多忙の中、調査に快くご協力いただきました。また、本稿の内容についても、事前にご確認いただきました。記して感謝申し上げます。

#### 注

- 1) 紙幅の都合上、詳述できないが、多文化保育に関わる研究動向はト田（2013）などが詳しい。
- 2) なお、横浜中華学院幼稚園部の幼稚園教諭への聞き取りについては、当時（2016年時）の共同研究者であった長江侑紀氏（東京大学大学院・院生）が一部実施した。
- 3) 園の教育目標、教学特色については、横浜中華学院幼稚園 HP (<http://www.yocs.jp/teacher/yocsyoutien/sample-page/>) を参照した。2019年5月30日閲覧。
- 4) 多文化状況の保育における幼児の言語コードスイッチングについては、中華系外国人学校附属幼稚園における園児の会話場面の観察をもとにした黄ほか（2018）がある。
- 5) 園の教育方針、保育内容については、熊猫（パンダ）幼稚園 HP (<http://www.yycs.jp/panda/index.html>) を参照した。2019年5月30日閲覧。
- 6) 園の保育理念、保育目標については、提供資料（保育園小紅リーフレット）及び横浜市子ども青少年局「保育園小紅」(<http://www.city.yokohama.lg.jp/kodomo/unei/hdata/n0797.html>) を参照した。2019年5月30日閲覧。
- 7) 園の目標、特色については、神戸華僑幼稚園 HP「園の概要」(<http://huayou.ed.jp/publics/index/2/>) を参照した。2019年5月30日閲覧。

## 参考文献

- 黄琬茜・山名裕子・榊原知美・和田美香, 2018, 「多文化保育における幼児のことば——5歳児のコードスイッチングに着目して」『保育学研究』第56巻第3号, pp.174-185.
- 稲垣恭子, 1992, 「クラスルームと教師」柴野昌山・菊池城司・竹内洋編『教育社会学』有斐閣, pp.91-107.
- 石川朝子, 2015, 「日本の華僑社会と中華学校教育の変容——華僑教育から華文教育へ」『帝京大学宇都宮キャンパス研究年報 人文編』第21号, pp.23-50.
- 喜始照宣・長江侑紀, 2017, 「多文化保育における保育者のストラテジー——横浜中華保育園を事例に」『田園調布学園大学紀要』第11号, pp.189-208.
- 国立教育政策研究所, 2015, 『外国人児童生徒の教育等に関する国際比較研究』国立教育政策研究所
- 中坪史典・金子嘉秀・中西さやか・富田雅子, 2011, 「保育者のストラテジーとしての感情労働——幼稚園の3歳児クラスの分析から」『幼年教育研究年報』第33巻, pp.5-13
- 芝野淳一・石川朝子・館奈保子, 2015, 「グローバル化時代における民族学校の経営戦略——大阪中華学校と横濱中華学院を事例に」『未来共生リーディングス』Vol.9, pp.70-88.
- ト田真一郎, 2013, 「日本における多文化共生保育研究の動向」『エデュケア』第33号, pp.13-33.
- 品川ひろみ, 2017, 「乳幼児に関わる課題——保育所を中心として」荒巻重人・榎井縁・江原裕美・小島祥美・志水宏吉・南野奈津子・宮島喬・山野良一編『外国人の子ども白書——権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から』明石書店, pp.63-65.
- 志水宏吉・中島智子・鍛冶致編, 2014, 『日本の外国人学校——トランスナショナルリティをめぐる教育政策の課題』明石書店

## [資料]

- 『保育園小紅設立三十五周年記念文集』（2003年, 横浜華僑小紅之会 発行）
- 『横濱中華学院創校百十週年記念特刊』（2007年, 学校法人横濱中華学院 発行）
- 『我們的舞龍舞獅』（2014年, 横濱中華学院 横濱中華保育園 発行）
- 『横浜山手中華学校校史 Since 1898』（2018年, 学校法人横浜山手中華学園 発行）

---

[きし あきのり 教育社会学]